

THE 14th
FUKUOKA ASIAN CULTURE PRIZES 2003
2003年(第14回)福岡アジア文化賞



GRAND PRIZE 大賞



ほかま 外間 守善

HOKAMA Shuzen

法政大学名誉教授
沖縄学研究所所長

Professor Emeritus, Hosei University and
President, Institute for Okinawan Studies

1924年12月6日生

Born December 6, 1924

日本

Japan

2003年（第14回）受賞者

略 歴

- 1924 沖縄県那覇市に生まれる
1950 國學院大學文学部文学士
1954 - 沖縄文化協会入会、78年から会長
1963 - 67 琉球大学文理学部講師、助教授
1967 - 68 和洋女子大学短期大学部教授・文学部兼担
1968 - 95 法政大学文学部教授・大学院兼担
1972 - 84 法政大学沖縄文化研究所副所長、所長
1975 - 79 九学会連合奄美調査委員長
1977 國學院大學文学博士
1979 - 85 法政大学久米島・久高島調査委員長
1980 ハワイ大学客員教授
1982 沖縄研究国際シンポジウム開催（東京・沖縄）、実行委員長・運営委員長
以後、第2回（92, 沖縄・東京）、第3回（97, 沖縄・シドニー）、第4回（2001, 沖縄、
2002, ボン）継続開催
1989 シドニー大学客員教授
1995 - 沖縄学研究所所長
1996 - 沖縄県立芸術大学客員教授
1998 - 2003 名桜大学客員教授、理事、評議員
1998 法政大学名誉教授

主な著作

- 『校本おもろさうし』（共編）、角川書店、1965
『おもろさうし辞典・総索引』（共著）、角川書店、1967
『うりずんの島-沖縄文学と思想の底流-』沖縄タイムス社、那覇、1971
『沖縄の言語史』法政大学出版局、1971
『おもろさうし』日本思想大系18（共著）、岩波書店、1972
『南島歌謡大成』全5巻（総編集）、角川書店、1978-80
『おもろさうし』古典を読む22、岩波書店、1985
『沖縄の歴史と文化』[中公新書]、中央公論社、1986
『南島文学論』角川書店、1995
『沖縄古語大辞典』沖縄古語大辞典編集委員会編（編集委員代表）、角川書店、1995
『定本琉球国由来記』（共編著）、角川書店、1997
『定本おもろさうし』（共編著）、角川書店、2002
『沖縄学への道』[岩波現代文庫]、岩波書店、2002

※出版地のないものは、すべて東京で出版

贈賞理由

「アジアの中の日本、日本の中のアジア」を考えるときに、沖縄研究は重要な位置を占める。外間守善氏は、その沖縄の言語・文学・文化研究をもとに「沖縄学」を大成し、その普及にも多大な貢献をしてきた。

常に日本の他の地域における文化や歴史を理解するときの里程標としての位置を持つ沖縄。アジアの諸地域との歴史的・文化的に深い交流を続けてきた沖縄。日本の他の地域とは異なる関わり方でアジア諸地域へ積極的な活動を見せる沖縄。沖縄からアジアへと、アジアから沖縄へとのダイナミックな動きをとらえるものとしての沖縄研究の現代的な重要性がある。

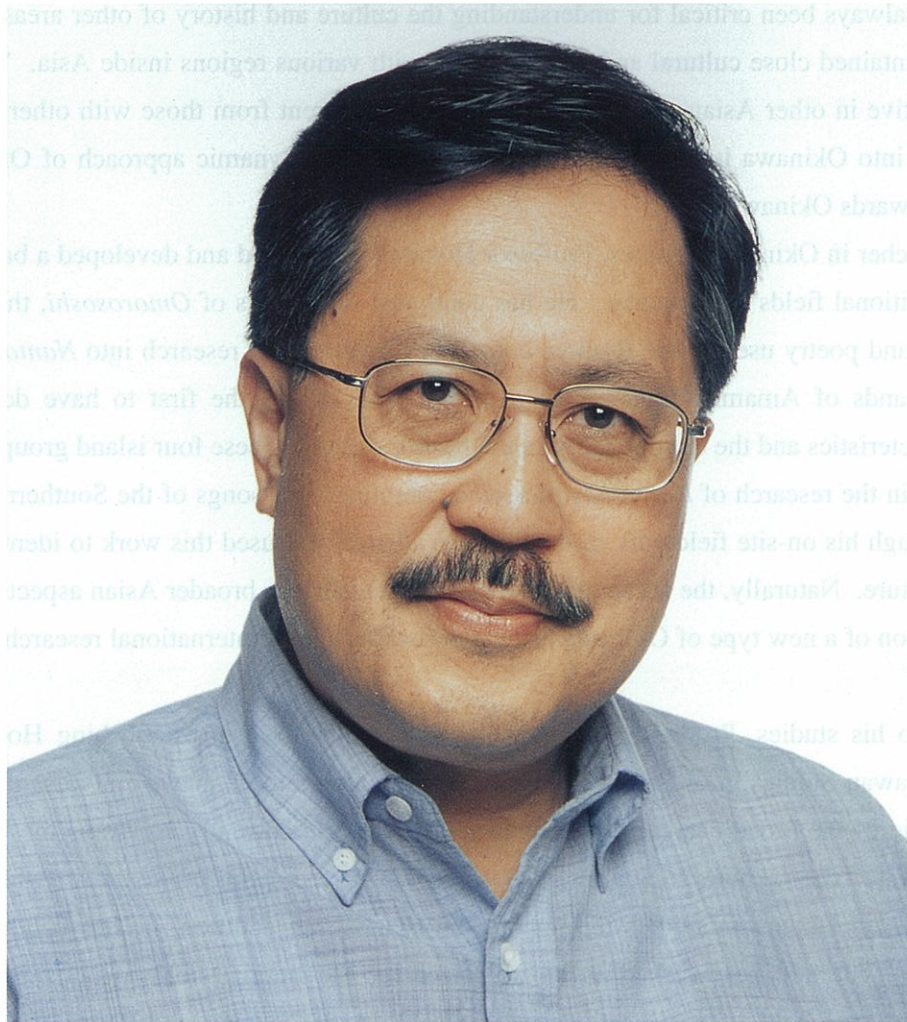
外間氏は、この沖縄研究の中心的な研究者として、特に伝統的な分野での研究基盤を築き発展させてきた。同氏は、沖縄最古の歌謡集である『おもろさうし』の研究を続け、沖縄各地のフィールドワークにより収集した歌謡を集めた『南島歌謡大成』などの研究にリーダーシップを発揮し、沖縄文化の基層を明らかにした。特に、南島歌謡の研究では、奄美・沖縄・宮古・八重山の4グループの特徴とその底に流れる共通性を初めて論証した。その研究の目は、当然広くアジアへ向けられていて、「沖縄学」の国際的な共同研究など、新たな沖縄研究の創生へと向けられている。

また、外間氏は、このような研究の面ばかりでなく、大きくまとめた「沖縄学」の成果を一般の人々にも知ってもらい、さらなる研究の発展をはかるために、法政大学の沖縄文化研究所の創設に中心的な役割を果たし、また、今日に至るまでの25年の長きにわたり、沖縄文化協会の会長として沖縄各地で「沖縄学」について講演も続けている。その他、沖縄各地のフィールドワークや東京・沖縄・シドニー・ボンなどでの沖縄研究国際シンポジウムのオーガナイザーとして活躍するかたわら、法政大学・東京大学・國學院大學などでも後進の指導にあたってきた。

このように外間氏は、「沖縄学」の基礎作りから今日的な研究の到達点まで常に関わっており、さらに広くアジア全域をも視野に入れる研究も目指している。この業績は、まさに日本人初の「福岡アジア文化賞—大賞」にふさわしいものといえよう。

ACADEMIC PRIZE

学術研究賞



レイナルド・C・イレート

Reynaldo C. ILETO

シンガポール国立大学教授

Professor, National University of Singapore

1946年10月3日生

Born October 3, 1946

フィリピン

Philippines

2003年（第14回）受賞者

略 歴

- 1946 マニラに生まれる
- 1963-67 アテネオ・デ・マニラ大学人文学士
- 1967 コーネル大学人文学社会科学奨学生に留学（4年間）
- 1970 コーネル大学修士（東南アジア史・近現代中国史）
- 1974 コーネル大学博士（東南アジア史・人類学）
- 1974-76 オーストラリア国立大学太平洋研究所ポスト・ドクトラル研究員
- 1977-85 フィリピン大学歴史学科助教授（1984年から準教授）
- 1980 カリフォルニア大学サンタ・クルーズ校、客員フルブライト講師
- 1984-85 フィリピン、デ・ラ・サール大学タニャダ記念歴史学教授
- 1985 米国アジア研究協会よりハリー・ベンダ賞
- 1986 大平正芳記念賞
- 1986-95 オーストラリア、ジェームズ・クック大学歴史学部専任講師（1991年から準教授）
- 1991-92 京都大学東南アジア研究センター招請研究員
- 1996- オーストラリア国立大学アジア研究学部助教授（2002年から非常勤教授）
- 1997 ハワイ大学マノア校歴史学部ジョン・A・バーンズ記念教授
- 1999 フィリピン国民図書賞（歴史部門初）
- 2000-01 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所客員研究員
- 2001- シンガポール国立大学東南アジア研究プログラム教授（2003年からプログラム長）

主な著作

- 『マギンダナオ, 1860-1888 —ブアヤン王国 ダト・ウトの生涯』[コーネル大学東南アジアプログラム叢書 No.82], ニューヨーク, 1971(再版: ミンダナオ州立大学研究センター, フィリピン, 1984)
- 『キリスト受難詩と革命—1840-1910年のフィリピンにおける民衆運動』アテネオ・デ・マニラ大学出版, ケソン市, 1979(改訂版: 1997)およびハワイ大学出版, ホノルル, 1998(第6刷: 2003)[ベトナム語訳あり、日本語訳 近刊]
- 『宗教と反植民地運動』(『ケンブリッジ 東南アジアの歴史』第2巻, ケンブリッジ大学出版, ケンブリッジ, 1992)
- 『オーストラリアの発見: フィリピン—オーストラリア関係に関する考察』(共編), ジェームズ・クック大学出版, タウンズビル, オーストラリア, 1993
- 『フィリピン史の非線形的構想の概要』(『資本の影に隠れる文化政治: 手を結ぶ世界』デューク大学出版, ダラム, ノースカロライナ, 1997)
- 『フィリピン人と彼らの革命—出来事、言説、歴史叙述』アテネオ・デ・マニラ大学出版, ケソン市, 1998 およびハワイ大学出版, ホノルル, 1999
- 『アメリカの植民地を知る—フィリピン戦争からの100年』(バーンズ記念教授講演, 1997)[フィリピン研究論集 No.13], ハワイ大学マノア校 ハワイ・アジア太平洋研究科フィリピン研究センター, ホノルル, 1999)[日本語訳 近刊]
- 『比米戦争、友情、そして忘却』(『戦争の痕跡: 比米戦争と帝国の夢の余波1899-1999』ニューヨーク大学出版, ニューヨーク, 2002)

贈賞理由

レイナルド・C・イレート氏は、19世紀末から20世紀初頭のフィリピン革命を中心とする歴史研究において常に先導的役割を果たしてきた。同氏は、底辺あるいは周縁に置かれた者たちの声に耳を傾け、抵抗する民衆の心の内を深く理解することをとおして、エリートでなく民衆を主役とする新たな革命史像を鮮明に提起した。また歴史研究を、文学や宗教学、文化研究などの研究分野と関係づけ、学際的研究の領域として拡大し活性化してきた。

主著である『キリスト受難詩と革命』（1979）でイレート氏は、東南アジアで最初の反植民地・民族解放の運動と革命が広範な民衆の支持と参加を得ることができたのは、宗主国であるスペインがもたらしたカトリックの教えにほかならないことを明らかにした。一般民衆がイエス・キリストの受難の物語を手本とし、それからの類推で、300年におよぶスペイン支配を悪と捉え、カリスマ的な指導者にしたがって立ち上がっていった経緯が、共感をこめて生き生きと描かれている。

さらに近年では、革命指導者ボニファシオの評価と、革命に介入・弾圧してフィリピンを植民地としたアメリカの役割をめぐる論争を通じて、アメリカ人研究者らのオリエンタリズム（欧米の自文化中心主義的な見方・考え方）を痛烈に批判し、知識・思想・精神における脱植民地化の動向を進めるうえで大きな貢献をしている。アメリカからの独立後、半世紀以上を経た現在も続く、植民地支配の強い影響や束縛から脱し、しかし偏狭で排他的なナショナリズムに陥ることなく、誇りうる歴史と文化の自画像を描き出そうと苦闘するイレート氏の研究は、日本を含めたアジア各国の研究者に対しても大きな刺激と励ましを与えている。

批判的知識人の責務を自覚しながら、日本およびアジア太平洋地域の数々の大学や研究所で教育研究活動に当たり、後進の育成と刺激的な研究を進めるイレート氏の活動は、「福岡アジア文化賞—学術研究賞」に真にふさわしいといえる。

ARTS AND CULTURE PRIZE 芸術・文化賞



シュ
徐 ビン
 冰

XU Bing

アーティスト
1955年2月8日生
中国

Artist
Born February 8, 1955
China

2003年（第14回）受賞者

略 歴

- 1955 中国、重慶に生まれる
- 1957 北京へ移る
- 1975-77 文化大革命時、下放政策により中国北部で労働に従事
- 1977 北京、中央美術学院入学
- 1987 中央美術学院にて芸術学修士（版画）
- 1990 アメリカへ渡る
- 1999 マッカーサー賞

主な個展

- 1991 「天書」東京画廊
- 1991 「徐冰による3つのインスタレーション」エルベヘム美術館（ウィスコンシン大学 マディソン校）、アメリカ
- 1994 「徐冰：近年の作品」ブロンクス美術館、ニューヨーク
- 1997 「書法教室」ジョアン・ミロ財団、スペイン
- 1998 「徐冰：新英文書法入門」ニュー・ミュージアム、ニューヨーク
- 2000 「徐冰：天書&書法教室」プラハ国立美術館、チェコ
- 2001 「風景を読む」ノースカロライナ美術館、アメリカ
- 2001 「言葉遊び：徐冰による現代美術」アーサー・M・サックラー美術館（スミソニアン・インスティテュート）、ワシントンDC
- 2002 「徐冰：生きている言葉2」ハーバート・F・ジョンソン美術館（コーネル大学）、アメリカ

主なグループ展

- 1989 中国現代美術展、中国美術館、北京
- 1993 第45回ベネツィア・ビエンナーレ、イタリア
- 1994 「生と熟」レイナ・ソフィア美術館、マドリード、スペイン
- 1997 第2回ヨハネスブルグ・ビエンナーレ「トランスヴァージョンズ」、南アフリカ
- 1998 「クロッシングズ」カナダ国立美術館、オタワ
- 1999 「グローバル・コンセプチュアリズム」クイーンズ美術館、ニューヨーク
- 1999 「対話するアート・ワールド—世界のアート、ラインラント2000」ルードビヒ美術館、ケルン、ドイツ
- 1999 「パナー・プロジェクト」ニューヨーク近代美術館
- 1999 第1回福岡アジア美術トリエンナーレ、福岡アジア美術館
- 2000 「微妙なバランス：ヒマラヤへの6つの道のり」キアズマ現代美術館、ヘルシンキ、フィンランド
- 2000 第12回シドニー・ビエンナーレ、ニュー・サウス・ウェールズ美術館、オーストラリア
- 2002 第4回上海ビエンナーレ、上海美術館
- 2002 第1回広州トリエンナーレ、広東美術館

2003年（第14回）受賞者

贈賞理由

徐冰氏は1980年代から、常に中国の先鋭的なアートシーンの先頭に立ち、アジアの現代美術に対する国際的な評価を高める大きな役割を果たしてきた。

1955年、四川省重慶に生まれ、57年より北京で育った徐氏は、66年から始まった文化大革命期に中国北部の農村に下放されたが、革命終焉後の77年、北京の中央美術学院に入学し、版画を専攻した。

1987年から4年がかりで、4000個もの実在しない独創的な「偽漢字」（^{へん}と^{つくり}旁を組み換えて再構成した偽の漢字）の創作に集中し、それを木刻印刷した作品『^{せきせいかん}析世鑑—天書』を、北京で初めて行われた現代美術展「中国現代美術展」にて発表。漢字文化圏の従来の認識をゆるがすそのコンセプトは一躍注目を集め、国内外で「徐冰現象」という論争まで引き起こすほどの大きな反響を呼んだ。また、この作品は、中国における本格的なインスタレーション・アートの歴史の開幕をつけるものともなり、「偽漢字」の創造がもたらした徐氏の功績は、今日まで伝説のように語り継がれている。

1990年、アメリカへ拠点を移してから、徐氏の活動は欧米やアジアへと広がり、世界各地の重要な国際展に次々と招待されるようになった。90年代の代表作『新英文書法』は、アルファベットの組み合わせで構成される独創的な「英文漢字」を新しく創りだすもので、その観衆参加型ともいえる手法ともあいまって、世界各地で専門家から一般の人までの幅広い層の高い支持を獲得している。『新英文書法』は、西洋と東洋の文化の間に横たわる壁や、現代美術への近寄り難さという壁をも乗り越えさせることに成功し、さらに誰でも試みることのできる現代的な美術創造への可能性も潜在する画期的な創作といえよう。

ここ数年、漢字から成る風景画の創作に取り組むなど、文字を用いた表現はさらなる大きな展開をみせている。このように独創的な「偽漢字」や「英文漢字」の創造を通して我々の固定観念に挑戦し、自らの文化にしっかりと根をおろしながらも、同時にそれからの創造的な飛躍を目指す徐氏の姿勢は、アジアの現代美術家の指標となっており、その影響力と業績は、まさに「福岡アジア文化賞—芸術・文化賞」にふさわしいといえる。

ARTS AND CULTURE PRIZE 芸術・文化賞



ディック・リー

Dick LEE

シンガーソングライター

Singer-songwriter

1956年8月24日生

Born August 24, 1956

シンガポール

Singapore

略 歴

- 1956 シンガポールに生まれる
- 1971 ボーカル・グループに参加。その後、バンドを結成しオリジナル曲制作開始
- 1973 ソロで地元ケーブル・ラジオ局のオーディション番組に出演。レコード会社の目にとまる
- 1974 アルバム『ライフ・ストーリー』でデビュー
- 1977 - 81 ロンドンに留学、服飾デザインを学ぶ
帰国後、ファッションデザイナー・舞台演出家としても活躍の場を広げる
- 1989 8枚目のアルバム『マッド・チャイナマン』がシンガポールでリリース
- 1990 アルバム『マッド・チャイナマン』で日本デビュー、初来日公演
- 1991 「エイジア・メイジア・ジャパン・ツアー」札幌、東京、名古屋、大阪、福岡で計9回公演を行う
- 1992 ミュージカル『ナガランド』で原作・作曲・主演
- 1995 香港映画「君さえいれば / 金枝玉葉」の主題歌『追 / The Search of My Life』で香港
電影金像獎最優秀主題歌賞
- 1997 第52回国民体育大会「なみはや国体」（大阪）のテーマソング『WE CAN CHANGE THE
WORLD ～いまこのとき～』を作詞、作曲
- 1998 コンパス (COMPASS/シンガポール作詞作曲家協会) から最優秀国内ポップソング [英
語] および最優秀国内作曲家に選ばれる。以後、コンパス優秀芸術家賞 (1999)、最優秀
国内ポップソング [中国語] (1999)、最優秀国内作曲家 (1999, 2000, 2001) に選ばれる
- 1998 - 2000 ソニー・ミュージック・アジアのアーティスト&レコーディング担当副社長
- 1999 「世界音楽祭 オーガスト・イン・ヒロシマ '99」グランドコンサート “TOGETHER” 出演
- 2001 シンガポールテレビ局メディアワークスのクリエイティブ・ディレクター
- 2003 「日本ASEAN交流年2003 J-ASEAN POPs」イメージソング作詞 (作曲:宮沢和史)

主な作品

ミュージックアルバム

- | | |
|-------------------------|-------------------|
| ライフ・ストーリー (1974) | マッド・チャイナマン (1989) |
| エイジア・メイジア (1990) | オリエンタリズム (1991) |
| ライフ・ストーリー [ベスト盤] (1993) | シンガポップ (1996) |
| トランジット・ラウンジ (1999) | エヴリシング (2000) |

演劇・ミュージカル

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| ビューティー・ワールド (1988) | フライド・ライス・パラダイス (1991) |
| ナガランド (1992) | 香港ラブソディ (1993) |
| シング・トゥー・ザ・ドーン (1996) | 雪狼湖 (1998) |
| リ・ミックス (2001) | フォビドゥン・シティ (2002) |

贈賞理由

ディック・リー氏は、アジアを代表するシンガーソングライターであり、現代においてもっとも活力あるアジア・ポピュラー音楽の旗手として国際的にも高く評価されている。

本名はリチャード・リー（^{リーベンアン}李迪文）。5歳よりクラシックピアノを学び始め、マレーシア、インドネシア、中国などアジア諸地域、イギリスをはじめとする欧米の文化など複雑に融合するシンガポールの文化的背景の中で、幅広い音楽的視野を身につけている実力派である。

中国系の家系でありながら中国語が話せず英語を話すという現実を背負い、自己のアイデンティティを追求しつづける中で、ディック・リー氏の音楽は開花していった。また、英語のシンガポール訛りとも言うべき「シングリッシュ」に愛着を持ち、自作の曲に使用してその再認識を深めるなど、自らの文化を主張する姿勢は、東南アジアのみならずアジア全体に根ざす音楽の発展を意図する活動として非常に貴重である。

1974年、17歳で、デビューアルバム『ライフ・ストーリー』を発表。オリジナル曲ばかりの英語のアルバムとしてはシンガポール初であった。その後も、外国の歌の模倣が主流という同国の状況の中、自作のオリジナルな音楽を発表しつづける。

90年にアルバム『マッド・チャイナマン』で日本にデビューし、大ヒットを記録する。つづく『エイジア・メイジア』『オリエンタリズム』などの作品でアジア・ポップスのトップとしての地位を確立するとともに、ミュージカル『ナガランド』では原作、作曲、主演もこなし、多才ぶりを発揮している。

そのほか、ファッションデザインの分野での活躍や他のアーティストおよび国内外の式典・イベントへの楽曲提供や演出など、アジアにおける幅広い活動を展開しており、今後の活躍がますます期待される。

シンガポールを軸に、アジアのポピュラー音楽の発展に大きく寄与しつづけるディック・リー氏は、自分を生み育んだアジアそのものを一貫して表現することにより、アジアのポピュラー音楽というジャンルを先導した。その功績はまさしく「福岡アジア文化賞—芸術・文化賞」にふさわしいといえる。

授賞式

日 時：9月18日（木）14：00～16：15

会 場：福岡国際会議場メインホール

秋篠宮紀子妃殿下をはじめ、大使館関係者、留学生、国際交流団体、経済団体、大学、地域団体の代表者及び市民など約1,000名の参加を得て行われた。

式典では、映像での受賞者紹介や主催者による賞の贈呈のほか、来賓の美根慶樹外務省特命全権大使及び麻生渡福岡県知事の祝辞が述べられ受賞者の業績をたたえた。受賞者によるスピーチでは、4名の受賞者が受賞の喜びを表し、市民に対するメッセージなどを語った。

また、特別演奏として、沖縄県出身のバンド、BEGIN（ビギン）の演奏が行われ式典に花を添えた。



美根慶樹外務省特命全権大使による来賓祝辞
H. E. Ambassador Mine Yoshiki, Ministry of Foreign Affairs delivering a congratulatory address



麻生渡福岡県知事による来賓祝辞
Governor Aso Wataru delivering a congratulatory address

受賞者あいさつ



大 賞
外間 守善

私の専攻している学問は沖縄学といいます。耳なれない学問でしょうが、日本学、シナ学、エジプト学などと並べて沖縄学といっています。生まれて今はちょうど100年目です。その沖縄学に「福岡アジア文化賞」をいただいたことは思いがけないことでした。個人としても身にあまる光栄だと思っております。

福岡アジア文化賞というのは、2000年以上アジアの文化交流につくしてきた福岡が、新しい時代にふさわしい創造性を加えて新しく設けられた賞だそうです。文化の栄えた国は政治も経済も豊かであったことを歴史は教えてくれます。

14世紀から16世紀にかけてアジアの国々は動乱の歴史を経験しました。動乱の中から各国民族は、民族的自覚に目覚めて国家の自立、独立を図り王朝が生まれました。日本は室町幕府、朝鮮半島は李氏王朝、中国は明王朝、タイランドはアユタヤ王朝、インドネシアはマジャパイト王朝、マレーシアはマラッカ王朝、そしてそれらをつなぐ役目を果たしたのが琉球王朝でした。王朝の生まれたところではそれぞれ個性的な文化が生まれて輝いていました。

その時代から500年位たった今、アジアはふたたび懸命に民族的自立、経済的豊かさを求め、平和的な時代を迎えようとしています。また、アジア中が平和な21世紀を迎えなければなりません。ヨーロッパでは21世紀に向けてヨーロッパ連合を作りました。アジアもアジア連合を作るべきだと思います。そのための心の支えに文化は必要なことです。アジア問題は文化問題だと思います。

福岡市と財団法人よかトピア記念国際財団が福岡アジア文化賞を設けたのは14年前だそうです。21世紀を先どりした優れて知性的な才覚だったと思います。福岡市ならびに財団法人よかトピア記念国際財団に心からお礼を申し上げます。

最後に、今日の授賞式のために秋篠宮紀子妃殿下をはじめ福岡市長、財団法人よかトピア記念国際財団理事長はじめ、たくさんの方々が授賞式においで下さいましてまことに有難うございました。お礼を申し上げてごあいさつといたします。

受賞者あいさつ



学術研究賞
レイナルド・C・イレート

私は、1965年、18歳の時に、初めてフィリピンを出る機会があり、祖母と姉と一緒に、10日間日本を訪ねました。その時はこの旅が自分の人生の転機になろうとは思いませんでした。当時、私は大学生で、技術工学を専攻していましたが、日本で見たもの、体験したことにすっかり魅了され、マニラに帰った時、技術工学の勉強をやめる決心をしました。かわりに大学の残りの期間をアジアの歴史や文化を学ぶことにしたのです。

38年経った今、私はアジア研究でもっとも名誉ある国際賞を受けるためにここ福岡市にきています。工学の勉強をやめて、アジアの歴史や文化を研究するきっかけとなったのが日本への旅だったのですから、この賞は私にとって、ことさら大きな意味を持っています。

私にとって福岡アジア文化賞は、アジアの芸術家や研究者を顕彰してきたという点で、他に類を見ない賞賛されるべき特徴もっています。私がアジア研究を始めた当時は、自国育ちの研究者が国際的な評価を受けることはほとんどありませんでした。私の場合もそうです。博士課程に進んだ1967年には、東南アジアの歴史を学ぶために、アメリカへ行かなければなりませんでした。私の指導者は東南アジア史研究の草分けでしたが、2人ともイギリス人で大英帝国に仕えた人たちでした。当時、東南アジア研究の分野で活躍していたのは全て欧米人だったのです。自分の国や地域の研究で「成功」したかどうかは、地元のアジア研究の先駆者になるのではなく、どれほど西欧の知的文化や方法論を吸収したかが問われるという「皮肉」を理解するのにしばらくかかりました。

1960年代と違って、今の東南アジアの学生は、東南アジアの研究をするために、西洋のモデルだけに頼る必要はありませんし、イギリスやアメリカに渡る必要もありません。しかし、アジアの学問を正當に評価し、東南アジアを研究の中心に据えるということは依然として容易なことではありません。このような中で、福岡アジア文化賞はアジアの学問をこのような形で顕彰し、アジアの人々どうしのコミュニケーションを強化することで、東南アジアを学問の中心地にすることに大きな力を注いできました。

福岡アジア文化賞を私に授与していただいたというだけでなく、アジアでアジア研究をおこなえるようにご尽力いただいたことに対し、福岡の皆様から心から感謝いたします。

受賞者あいさつ



芸術・文化賞
徐 冰

10年ほど前に、アメリカで暮らしている私と妹の様子を見るために、母親が訪れました。当時、私も妹も渡米して間もない頃で言葉の壁にぶつかっていました。私達が英語を話すことで議論していたところ、母が横から次のように言いました。「あなたたちは母国語を持っているでしょう。自分たちの背後にすぐれた文化と伝統がちゃんとあるの。誰の前でも劣等感を持つ必要はありません」。母は典型的な古いアジア女性で、気がやさしくて文句ひとつ言わず、よく働く申し分のない母親です。そして、自国の文化に対して高いプライドを持っています。私は母のこの言葉に感謝しています。なぜなら欧米で仕事をしていく私に自信と勇気を与えてくれたからです。

中国では文化大革命による伝統の破壊で、私達の世代は古い文化の教育を厳しく受けていません。しかし文化というものは、ときには生活の中のちょっとした事に対する人々の態度や受け継がれた言動のうちに生き延びていくものです。その最も肝心な部分是一种の「情」のようなもので、決して知識ではありません。

かつて「天書」と呼ばれる「書物」を創作したことがあります。精巧なのに読み取ることが出来ません。私は1年余りかけて4000余りの「偽漢字」を彫りました。完成したとき、みんなに「すごい!根気があるね」と言われました。しかし、ある古籍書を印刷する工場へそれを持ち込んで印刷を頼む際、私は仏教の『大蔵経』の木製原版が山のようになっているのに強く心を打たれました。文化とはこのように遅く生きているのかと思いました。お経の中に何が書かれているかは知らなかったのですが、そこに文化の真実が内在していることを感じ取ることが出来ました。それに比べると自分が恥ずかしくなりました。私達の巨大な歴史文化の前で自分がなんとちっぽけな存在かとおつくづく感じました。

近年、私は中国またはアジアという看板を出して自分を売っていると批判されることがあります。これに対し私は、中国人だから中国という看板を出さなければ、一体誰の看板を出せばよいのだろうか、と答えています。西洋文化が優勢である今日、なかには物事を見る角度や視覚に問題がある人がいます。しかし福岡の市民と文化活動に携わる方々はいつもアジア文化に対し誇りを持ち、前向きな態度で世界に向き合っているように思います。私もアジア人やアジア文化の独自性と普遍性を信じています。また、ほんとうにすばらしい文化とは、いろいろな文化が混在し、融合しているものだと思います。

最後に、このような貴重な賞をお贈り頂いたことについて福岡アジア文化賞委員会に心からお礼を申し上げます。この賞は私の今後の創作活動の励みになるでしょう。

受賞者あいさつ



芸術・文化賞
デイック・リー

私は、1990年に初めてのコンサート・ツアーで日本にきました。その時に、レコードショップに並んでいるアジアの音楽は限られたものしかなく、しかも「伝統音楽」とか「民族音楽」のコーナーに置かれていました。

アルバム『マッド・チャイナマン』では、伝統と現代を過激なまでに混ぜ合わせましたが、私の意図したところは、自分が生まれ育った国シンガポールの多様な文化を構成している様々な民族の音楽をふんだんに盛り込んだポピュラー音楽を創造することにあります。そして、シンガポールの公用語である英語で歌いました。

レコードショップにアジアのポピュラー音楽のコーナーがなかったのも、私のアルバムは世界の音楽や西洋ポピュラー音楽のコーナー、そして面白いことに日本のポピュラー音楽であるJポップの棚にも置かれていました。自分の音楽が一つのジャンルにあてはまらないのを見て大変愉快に思い、強烈なアジアのアイデンティティを表現したいという自分の生涯の目標に一步近づいたと感じたできごとでした。

もちろん、私はアジア人ですが、同時に（マレーの血をひく）海峡生まれの中国人でもあり、シンガポール人でもあります。当時、私のアジアに対するイメージは、埃っぽく、時代遅れで、世界の変化に追いついていけないというものでした。加えて初来日の間に、日本人のアジア観も限られたもので、アジアのことをよく知らないということに気がきました。この感覚は改めなくてはいけないと思ったのです。

それまでの私は自分の音楽人生のほとんどを、自分自身を見つけ、アジア人として音楽を表現することに費やしていました。シンガポールをテーマにした作品である程度成功を収めていましたが、日本への訪問が、その模索をさらに一步前に踏み出すきっかけになりました。私は、アジア人として自分の音楽を定義したいと思いました。そして無意識のうちにアジアの全てのもの、特に現代アジアの中に新しい流れを作りたいと思ったのです。

その後の日本ではアジアに対する興味が爆発的に高まりました。そして、私の日本での成功は、香港や台北などアジアの都市での活動へとつながりました。私はアジアの都市が急速に変化している様をまのあたりにし、自分達に対する自信を構築するために自分達のイメージを再形成することがいかに大切か、そして、近代的で前向きなイメージを世界に発信することも大いに必要だと学びました。

今日のような賞や行事は、アジアのイメージ形成や発信に大きな手助けとなっています。私は大好きな九州で、ここに立っていることを大変光栄に思います。福岡市と福岡アジア文化賞委員会の皆様に、私を賞に選んでいただいたことにお礼を申し上げます。とりわけ、私のジャンルであるポップカルチャー（大衆文化）がついにアジアのアイデンティティの発展に貢献していると認められたことを本当にうれしく思います。

皆様、心より感謝いたします。そしてこの大切なプログラムのさらなるご成功をお祈りいたします。

市民フォーラム

沖縄からアジアへ

日時：9月20日（土）14：00～16：00

会場：アクロス福岡イベントホール

参加者：約250名



1 テーマ 沖縄学の深さと広さ、そして沖縄の未来へ

2 プログラム	趣旨説明・出演者紹介	龍谷大学経済学部教授	田尻 英三
	基調講演	大賞受賞者	外間 守善
	講演	千葉大学文学部教授	松本 泰丈
		作家	又吉 栄喜※
		沖縄県立芸術大学付属研究所教授	波照間 永吉

※注記：又吉栄喜氏は台風の影響により、出席できませんでした

3 概要

田尻氏は冒頭で、沖縄の歴史や文化に触れながら外間氏の功績を紹介するとともに、「沖縄の伝統的な文化から新しい文化の流れをとらえることが、同時に沖縄の素晴らしさを考えることになる」と語った。

基調講演において外間氏は、「沖縄は深くて広い。沖縄は、自然科学・社会科学・人文科学すべての面において宝の山である」と述べ、その具体例を挙げていった。言語学に関しては、ハ行子音の地域性や、『おもろさうし』に見られる終止形ではなく連用形を中心とする動詞の変化について、音楽に関しては、アジア音楽の5音階にも西洋音楽の7音階にも縛られない近年の沖縄音楽を取り上げ、「21世紀の新しい音楽は沖縄から生まれる可能性がある」と評価。文学に関しては、叙事（ことがら）と抒情（こころ）だけでなく呪術（いのり）の文学があるのは、世界でも極めて珍しい例であることを強調した。

続いて松本氏が、奄美方言を中心とした「琉球方言のゆたかさ」について講演し、琉球方言の地域差や九州方言との共通点などを詳細に解説した。

さらに外間氏は、沖縄学の出発から100年目、自身が沖縄学に携わって50年目という節目における受賞を喜ぶとともに、沖縄学に出会った頃のエピソードなどを語り、「今、誇りをもって沖縄学に取り組んでいる」と胸を張ると、会場から大きな拍手が湧き起こった。

出演予定だった又吉栄喜氏が悪天候のため来福できないというハプニングはあったものの、沖縄に対する外間氏の熱い思いが十二分に伝わってくる充実した内容となった。



外間 守善氏
Professor Hokama Shuzen



田尻 英三氏
Professor Tajiri Eizo



松本 泰丈氏
Professor Matsumoto Hirotake



波照間 永吉氏
Professor Hateruma Eikichi

市民フォーラム

記憶と忘却の政治学

日 時：9月21日（日）13：00～15：30
 会 場：アクロス福岡イベントホール
 参加者：約150名



1 テーマ フィリピンの戦争から「帝国」を考える

2 プログラム	趣旨説明・出演者紹介	九州大学大学院比較社会文化研究院教授	清水 展
	基調講演	学術研究賞受賞者	レイナルド・C・イレート
	パネルディスカッション		
	パネリスト	東京外国語大学長	レイナルド・C・イレート
		九州大学大学院比較社会文化研究院教授	池端 雪浦
	コーディネーター		有馬 学
			清水 展

3 概 要

冒頭で清水氏は、フィリピンと日本との歴史的な関係を説明し、「フィリピンの歴史を学ぶことを通じて、今という時代を考えてみたい」と問題提起した。

イレート氏は基調講演で、フィリピンにおける戦争の“記憶と忘却”について論じた。対スペイン独立戦争は、国民国家の形成の基礎となる出来事として深く記憶に刻まれたこと。比米戦争の記憶は忘却され、アメリカ人は解放者だという認識が奨励されたこと。抗日戦争はフィリピンを暗黒時代に陥れた出来事として記憶されたが、冷戦が激化するにつれて公式的な記憶からは忘却されていったこと。そして、現在のテロとの戦いにおけるフィリピン人の姿勢を「過去の戦争についての記憶の政治学を反映したもの」と述べ、「歴史学は、戦争の根本的理由を究明するためにあらねばならない」と、帝国の陰に隠された記憶を再生することの重要性を訴えた。

パネルディスカッションでは池端氏と有馬氏が、歴史の記憶と忘却に関する自らの体験を事例としてあげるとともに、記憶と忘却により重層的に形成された歴史観とそこからつながる政治の問題について論じた。「今後は、フィリピンにおける記憶と忘却の政治学のあり方と、我々の歴史観を突き合わせていくことが必要」との見解も示した。

最後に清水氏が、「戦後50年たった今だからこそ、戦争の加害者と被害者が対等に歴史を語り得るのかもしれない」と述べ、締めくくりの言葉とした。



レイナルド・C・イレート氏
Professor Reynaldo C. Ileto



清水 展氏
Professor Shimizu Hiromu



池端 雪浦氏
Professor Ikehata Setsuho



有馬 学氏
Professor Arima Manabu

市民フォーラム

アーティスト・トーク

日 時：9月21日（日）16：00～17：30
 会 場：福岡アジア美術館彫刻ラウンジ
 参加者：約150名



- 1 テーマ シュ・ビン -天から降ってきた文字-
- 2 プログラム 趣旨説明・受賞者紹介 福岡アジア美術館館長 安永 幸一
 トーク 芸術・文化賞受賞者 徐 冰

3 概 要

徐冰氏は数多くのスライドを見せながら、自らの生い立ちやアーティストとしての軌跡、さまざまな作品の制作にまつわるエピソードなどを紹介していった。

4年かけて4000個の偽漢字を創作した『析世鑑^{せきせいかん}-天書』の解説では、「一人の人間が何年もかけて作ったジョークだ」と語りながら、制作に使った道具なども紹介した。また「自分の置かれている環境に問題や葛藤があるとき、そこからアートが生まれる」と、自身の芸術に対する考えを示した。漢字や新英文書法で外の風景をガラス窓に描いた作品や、漢字で構成された風景画など、文字を用いて表現した一連の作品については、「書・絵・詩が一体となった表現に達することができ、誇りに思う」と、中国人アーティストとしての心情を語った。さらに1990年代の代表作『新英文書法』の制作意図について、「この書法を通して、人々の慣習化された思考を揺さぶり、新たな視点でも物事を考えるきっかけにしたい」と主張した。

参加者からは『新英文書法』に関する質問が相次ぎ、関心の高さをうかがわせた。フォーラムが終了した後も、徐冰氏は握手やサインを求める人々に取り囲まれ、いつまでも交流が続いた。また、トークは氏の受賞を記念して開催された^{シュ・ビン}展会場にて行われ、参加者は引き続き、名前などをアルファベットで入力すると新英文書法で表示される『コンピューター・フォント・プロジェクト』を体験したり、新作の『硝子の玩具』を手にとって眺めたりなど、会場は熱気であふれていた。



徐 冰氏
Mr. Xu Bing

安永 幸一氏
Mr. Yasunaga Koichi



市民フォーラム

アジアポップスセミナー～ディック・リーの夕べ～

日時：9月20日（土）18：00～20：00
 会場：イムズホール
 参加者：約400名



- | | | | |
|---------|---------------------------|--------------|---------|
| 1 テーマ | 音楽にのせて ～アジアのアイデンティティを探す旅～ | | |
| 2 プログラム | 趣旨説明 | 中部高等学術研究所副所長 | 藤井 知昭 |
| | パフォーマンス | 芸術・文化賞受賞者 | ディック・リー |
| | チャリティーオークション | | |
| | ラストソング | | ディック・リー |
| | 司 会 | LOVE-FM AJ | ジェームス天願 |

3 概 要

藤井氏はリー氏の経歴を紹介するとともに、リー氏が福岡アジア文化賞受賞することになった理由や背景などをあらためて説明した。

パフォーマンスでは、リー氏によるピアノの弾き語りトークが繰り広げられた。1990年に日本デビューと同時に大ヒットを記録した『マッド・チャイナマン』をはじめ、『エイジア・メイジア』『フライド・ライス・パラダイス』『ナガランド』といったリー氏の代表曲や2003年10月にリリースされるニューアルバム『ライス』からの1曲『セラドン』などが次々と披露された。また、リー氏は多様な文化が複雑に融合するシンガポールに生まれ育ち、自己のアイデンティティを追求し続けるなかで、西洋の模倣ではなく自らの文化を主張するオリジナルな音楽を開花させるに至った経緯などを語った。

続くチャリティーオークションでは、リー氏の愛用品などをめぐって会場は大いに盛り上がり、5名の観客が目当ての品を落札した。収益金はリー氏の希望により、福岡国際交流協会の留学生基金に寄付された。

会場は、ラストソングが終わってもなお熱気に包まれ、リー氏との別れを惜しんでいた。



ディック・リー氏
Mr. Dick Lee



藤井 知昭氏
Professor Fujii Tomoaki



ディック・リー氏と司会のジェームス天願氏
Mr. Dick Lee and Moderator Mr. James Tengan

学校訪問 SCHOOL VISITS

席田中学校

日時：9月19日（金）10：30～12：00

訪問者：大賞受賞者／外間 守善

生徒：1～3年生 約500名

外間守善氏が「人生のバランス」というテーマで講演を行った。これまで戦争体験について多くを語らなかった氏が、「戦争は人生のバランスを崩す。若い人たちがバランスのとれた世界を創って欲しい」と戦争のないバランスのとれた世界の大切さを生徒たちに熱く伝えた。

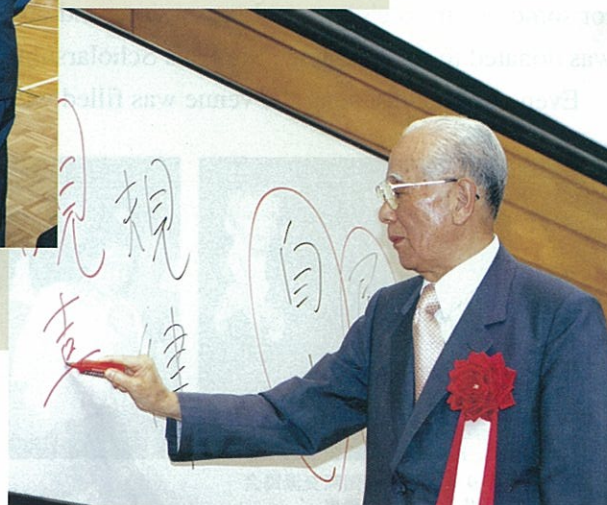
Mushiroda Junior High School

Date & Time: 10:30 - 12:00
Friday, September 19, 2003

Visitor: Professor Hokama Shuzen, Grand Prize Laureate

Students: Approx. 500 first- to third-grade students

Professor Hokama chose the theme, "Balance of Life" for his talk to the students. He who hardly ever talked a lot about his own experience of war, convinced them of the importance of a well-balanced war-free world. "Wars destroy the balance of life. I would like young people to make the world a well-balanced one," he said.



学校訪問 SCHOOL VISITS

修猷館高等学校

日時：9月19日（金）16：00～17：30

訪問者：学術研究賞受賞者／
レイナルド・C・イレート

生徒：1～3年生 約80名

レイナルド・C・イレート氏が「若者の役割について」というテーマで講演を行った。氏自身の体験や研究を通じて、「学生生活を楽しむとともに、社会のためとなることを思って勉強して欲しい。また、若いときに大いに旅行し、新たな世界に接して欲しい」と語った。生徒たちからは、戦争や文化・経済の今昔について熱のこもった質問が多数出るなど、大変有意義な時間を過ごしていた。

Shuyukan High School

Date & Time: 16:00 - 17:30
Friday, September 19, 2003

Visitor: Professor Reynaldo C. Iletto,
Academic Prize Laureate

Students: Approx. 80 first- to third-grade
students

Professor Iletto spoke about the "Role of Youth" in his lecture. By relating his own experience and research to the students, he suggested they enjoy their school life as well as study what will be useful for society. He also suggested they travel a lot when they are young to discover a new world. Students threw passionate questions at Professor Iletto, such as about the past and future of war, and cultural and economical changes. This made the talk a valuable experience.



学校訪問
SCHOOL VISITS

筑陽学園高等学校

日時：9月19日（金）10：00～12：40

訪問者：芸術・文化賞受賞者／徐 冰

生徒：2年生 約50名

生徒たちが、漢字のようで漢字でない文字、「新英文書法」のワークショップにチャレンジした。自分だけのオリジナルな文字を書くという作業に、最初はとまどっていた生徒たちだったが、徐冰氏の指導で見るとみるうちに上達し、既製の文字にとらわれず新しいものを創造する楽しさを満喫していた。

Chikuyo Gakuen High School

Date & Time: 10:00 - 12:40

Friday, September 19, 2003

Visitor: Mr. Xu Bing, Arts and Culture Prize Laureate

Students: Approx. 50 second-grade students

Participants challenged seemingly legible, illegible characters in the New English Calligraphy workshop. Although they struggled to create their own, original characters at the beginning, students showed immediate progress with Mr. Xu Bing's guidance. They fully enjoyed the experience of creating new fonts without being bound to any stereotype.



学校訪問 SCHOOL VISITS

福岡女子高等学校

日時：9月19日（金）13：50～15：10

訪問者：芸術・文化賞受賞者／ディック・リー

生徒：1、2年生 約320名

ディック・リー氏が、音楽に出会って、シンガーソングライターになる夢をかなえるために努力したことを語り、「夢は絶対かなう、夢をあきらめずに頑張ってください」と生徒たちにエールを送った。

また、作曲のワークショップでは、生徒たちが創作した作品を、リー氏がアドバイスしながらアレンジしてみると、生徒たちはそのすばらしさに興奮していた。

Fukuoka Girls High School

Date & Time: 13:50 - 15:10
Friday, September 19, 2003

Visitor: Mr. Dick Lee, Arts and Culture Prize Laureate

Students: Approx. 320 first- and second-grade students

Mr. Dick Lee talked about how his encounter with music made him strive to achieve his dream of becoming a singer-songwriter. He encouraged the students by saying "No dreams cannot be fulfilled. Do not give up your dream and work hard."

In the following workshop, Mr. Lee gave some advice and arranged three compositions created by students. His finishing touches to the songs arose a shout of joy and excitement from the students.

